



鉄の歴史

ゼードラチェック先生のこと

—戦後の圧延技術進歩のエピソード—

高木不折

Fusetsu Takagi

名古屋大学大学院 工学研究科
地圏環境工学専攻 教授 前同大学評議員

Prof. Dr.-Ing. Herbert Sedlaczek

—An Episode in History of Japanese Rolling Technology—

土木の分野で河川の事柄について学んでいる私が、権威あるこの会誌に拙文を寄せることになるなど思いもしなかったことである。私は、昭和50年より2ヶ年ドイツのアーヘン工科大学のルーヴェ教授(現 名誉教授)の処に滞在して以来、20年余りに亘り同大学と情報交換、研究者の交流などを続けて来た。

1992年と今年の滞独の折り、私と家内はアーヘン工大名誉教授で、元同大学長のウィンターハーガー先生に大変お世話になった。ルーヴェ教授の友人、ホッフマン氏(当時、州の河川局の重鎮)を通じて紹介して頂いたことによる。

1992年7月のある日、私共がウィンターハーガー教授夫妻、ルーヴェ教授夫妻と共に、ホッフマン夫妻宅に招待された折、ホッフマン夫人の御父上が、名古屋に金属鉄鋼の分野で技術指導のため滞在され、しかも名古屋で亡くなったこと、著書が邦訳されていたことなどを知った。ホッフマン夫人は、「もう古い昔のことですから…」とおっしゃっていたが、名古屋と深い所縁のある方ということで、私は強い印象を持ったことを覚えている。

帰国後、その分野の何人かの方々に伺ったが、そのようなエピソードを御存知の方がなく、私も忙しさにまぎれ何年かを過ごしてしまった。たまたま今年に2ヶ月程滞独する計画を立てたのを機に、何らかの情報が得られないかと考えた。名大の元評議員の山内睦文先生、評議員の浅井滋生先生にお尋ねした処、名誉教授の井上道雄先生から手掛りとなる事柄を伺うことができた。さらに、大同特殊鋼の堤正晴氏、佐々木健氏(現・昭和高压工業(株)社長)や八勝館の佐藤功さんなどからゼードラチェック教授(ホッフマン夫人の御父上)についてのエピソードや情報を頂くことができた。わが国の圧延技術の発展に大変な御貢献のあった方だということを知った訳である。

寄せられた情報と井上先生から送られた当時の写真、名誉教授の戸澤康寿先生から預ったゼードラチェック先生の

著書「圧延機」のコピーなどを、この度ホッフマン御夫妻にお届けした。ウィンターハーガー御夫妻、ルーヴェ教授夫妻と共に、ホッフマン氏宅にて勲三等瑞宝章の勲記と勲章も拝見し、御夫人の手料理を美味しく頂きながら、ゼードラチェック先生の事など談笑した楽しい一時となった。ホッフマン夫人は、ゼードラチェック先生のごことが日本で憶えられていたことを大変お喜び下さり、日本の皆様に心から宜敷くとの御伝言であった。

肝心のゼードラチェック教授については、専門の分野で教授を直接御存知の方々がまだまだ多いと思われるので、私が記すのは少々憚られる。ここではいろいろな方から頂いた情報の要点を拙いドイツ語に纏め、ホッフマン夫人にお届けした文章を下に記すに止めさせて頂くことにする。なおウィンターハーガー先生もまたアーヘン工科大学の金属製錬・電気冶金の元教授で、慶応大学の名誉博士でもある。この会誌の読者には先生を御存知の方も多であろう。たいへんな親日家であって、現在なお御健在であることを付記しておく。

この拙文が、わが国の圧延技術の歴史にあって、このような方の御貢献があったことが思い出され、あるいはお知り頂くきっかけとなるとすれば、私にとって喜びこれに優るものはない。

* * *

ヘルバート・ゼードラチェック(Herbert Sedlaczek)教授は大同製鋼、八幡製鐵、富士製鐵株式会社の招聘により、我が国の圧延技術の指導のため、1958年8月1日に名古屋に來られた。そこで、先生は非常に大きな役割を果たされ、きわめて顕著な貢献をされた。理論上の事柄ばかりでなく、実際の技術、技術開発の面でも非常に傑出した指導者であった。大同製鋼では、幾多の新技術(孔型法、凸ラッキング・スリップロールなど)の導入に継がり、能率、品質向上が大変進んだという。



Dr.-Ing. Herbert Sedlaczek

1958年9月11日、ゼードラチェック夫人も同じく訪日された。夫人はマリー・キューリー夫人(教授)の下で研究されていたこともあり、御夫妻は共に優れた科学者であった。

教授の2冊の著書“Das Walzen von Edlstählen(鋼の圧延)”¹⁾と“Walzwerke(圧延機)”²⁾は邦訳されている。このうち、“圧延機”は大同製鋼の林達夫博士(後の副社長)によって邦訳され、1960年6月に日刊工業新聞社より刊行されたものである。当時はこの2冊の本はわが国の圧延技術者の教科書であり、多くの大学の先生方、技術者、そして学生によって読まれ、学ばれたということである。その著書に提唱された実験式は1960年代の鉄鋼協会圧延理論分科会で頻繁に引用され、教授の意見と示唆は斯界において非常な注目を浴びていた。

ゼードラチェック教授は大同製鋼の工場で仕事をうまく行った若い技術者を見るととくに喜ばれ、握手をするなど褒めたたえられた様で、それは若い技術者には大きな荣誉であった。教授は既に1954年1月に八幡製鐵の招聘でその工場を訪ねておられた。以来、ゼードラチェック先生御夫妻はドイツにおいて多くの日本の技術者や学生のお世話をなさっていた。

1958年10月7日、奥様が古都、京都を訪ねておられた時、ゼードラチェック先生は名古屋の名大の近くの旅館、八勝館にて、突然に亡くなってしまわれた。八勝館は1950年に

は、天皇皇后両陛下が御宿泊になった有名な旅館である。八勝館の佐藤さんはなお当日のことをはっきりと憶えておられる。ゼードラチェック先生は、大変明朗にして、ユーモアに富んだお人柄だったこと。また、先生は技術者や大学の先生ばかりでなく、女中さんなどとも談笑されていた。当時の女中さんのうちのお一人は今なお八勝館に働いておられるが、ゼードラチェック先生は何より日本酒をよくお飲みになっていたということである。

ゼードラチェック先生は帰国を前にして、1958年10月13日、日本鉄鋼協会の名誉会員として東京において御講演をなさることになっていた。しかし残念ながら、それは実現しなかった。その講演原稿は先生の絶筆となったが、邦訳され、先生の著書“Walzwerke(圧延機)”の巻末に付記として収録されている。

名古屋大学の理学部の山田常雄教授の奥様はドイツ語に堪能でおられた。当時は名古屋でドイツ語を話す人はほとんど居なかったこともあり、山田先生御夫妻とゼードラチェック先生御夫妻とは大変に親交を深くされていた。1958年10月8日名古屋の南山大学の教会での御葬式、1958年10月11日東京、上智大学の教会での御葬式の後、ゼードラチェック夫人は御主人の御遺骨と一緒に、1958年10月16日ドイツにお帰りになったが、山田夫人はゼードラチェック夫人を助けるためドイツまで一緒に向かわれた。

1959年9月、名古屋は5000人以上の人々を失うという伊勢湾台風に見舞われた。その時、何人かの技術者がゼードラチェック先生の著作の邦訳に携わっていた家もまた、水勢に洗われたが、彼らは原稿を持って屋根の上に逃れ、その流失をくいとめたというエピソードもある。

我が国の圧延技術の揺籃期にヘルバート・ゼードラチェック教授は顕著な役割を果たされた。その業績に対し、天皇の名の下で日本国政府より勲三等瑞宝章が授与されている。

参考文献

- 1) Herbert Sedlaczek著, 浅村 訳: 鋼の圧延, 丸善(株), (1954)
- 2) 同上, 林 達夫 訳: 圧延機, 日刊工業新聞社, (1960)
その他 大同通信, 大同製鋼, 10, 11 (1958)
大同製鋼50年史など

(1998年11月2日受付)